

## 大陽礼拝

たなか踏基

日本では、峰でこ来光を拝んだり、正月初日の出を拝みながら四方拝が行なわれる。朝焼けの空の地平線に、神々しい太陽が壮麗に浮び上がると、人々は皆感動して思わず手を合わせて拝みたくなる。

日本固有の古神道にも大陽信仰、日拝鎮魂法といふのがある。一つとした大陽礼拝の儀式は、世界各地で行なわれてきたようだ。インド・タタガの世界でも、大陽礼拝のポーズは基本中の基本である。

旧約聖書の中では、唯一絶対神は「ヤムエ」で、他の全ての神を偶像視して崇拜する事は、厳しく禁止された。勿論大陽も月も他の天体を拝むことも、偶像崇拜と見做されたといふ。しかし、人々はその教えに抗して密かに大陽を崇拜するのを止めなかった。東を向いて礼拝し、日出(Rising Sun)國が在ることに憧れた。

「奇妙な」シリーズ第4弾「奇妙なフーパー鳥」を三月に脱稿。原稿用紙換算で全430頁となったので、前編(220頁、三月五日)、後編(210頁、三月十五日)と二回に分けてHPに掲載した。

昨年十一月から構想一ヶ月余。今年正月明けから本格的な執筆に取り掛かり、略二ヶ月で二つの物語を縦系と横系に織り込む一枚の織布、作品を編んだ積りである。即ち「業務上過失致死」から「天下り官僚との贈収賄」に発展する事件を縦系にし、本邦初公開の原典、九百頁の「The Socrus」(James A. Michener著)の大作の一部を横系にして、巧みに一枚の布が織り上がるような長編推理小説が完成すればと目論んだ。

この原典は、アマゾンで調査してみると米国でベストセラーになっている由、なので日本では殆ど翻訳もされず読まれてもいない。縦系を織成す神奈川県に起る「業務上過失致死」事件は、大学時代の友人の体験談を提供してくれたので、これをトントにした。最初、こ

れだけで社会派推理小説を執筆する予定だった。

偶然、昨年暮の大掃除で、机の周り整理中に、分厚いA4版の自費出版翻訳本を見付けたことが構想の発端である。手を休めてつい読み耽った。翻訳者は、元会社先輩の高原伸輔氏であった。自費出版としても、本当に全く自分独りで翻訳印刷製本装丁をこなす全部で二十五冊出版という限定本である。その貴重な一冊を謹呈してくれたものである。翻訳の「サヤの歴史物語の壮大さに感服した。米作者は、現代考古学者の語り部を登場させ、数千年前の聖地、イスラエルの架空の遺跡発掘の町、TEEL Markoに連れて行く。

この架空の町を舞台に、発掘順と逆に、遺跡の下層から上層に向って物語は展開する。本の目次によれば、全体は層1〜層1に分かれていて、全文の前後を廃丘(TEEL Marko)語 attical hill covering the ruins of an ancient city (意)とユツ部分が含まれている。Markoはアラブ語 (source of) は正に源である。カナン・フライ人、ユヤ教、聖地工サレムバル神、ヤムエ神とくれば、脳裏に想起するのは、奇妙で不思議な「日猶同祖論」であった。

「日猶同祖論」とは、「日本猶太同祖論」つまり日本人とユヤ人の祖先は同じ、もしくは先祖において何らかのつながりを有している可能性があるといふ説のことである。「神道ユヤ同祖論」とも言われる。とても知られている。ユヤ教の儀式と、神道の儀式に非常に類似点が多いといふ説である。信奉者は、意外にも両国共通して存在して居るようである。

一方、八百万の神々といふ、墮落した日本神道でなく、一神教時代の旧神道、所謂天皇制神道を復活せんとした江戸時代の傑出した国学者がいる。明治初年の神仏分離や廃仏棄釈運動にまで繋がった、過激思想の革命家である。それは平田篤胤である。

「わたしは、おてんとさまも見ずに死ぬ」といって座敷牢で非業の狂い死にした、島崎藤村の父、島崎正樹も、平田篤胤の死生観に猛烈に傾倒した信奉

者であったと、島崎藤村の研究者で知られ、著名なジャーナリスト梅本浩志氏が著書の中で述べている。島崎藤村とパリ・ミューン(社会評論社)によれば、最初平田篤胤は、同じ国学者の本居宣長の著作に触れ、その門を叩くがやがて、師のタブーを超え耶蘇教(キリスト教)の「ヤムエ思想を包括的に取り込み霊能真柱」を二十七歳で著したと伝えられる。

極在り来りの「日猶同祖論」では、面白みに欠けるくらいにはずまいか? 同祖的なタッチがあっても構わないから、今日本が抱える様々な社会問題で、古代猶太と日本が通じる「日猶同祖論」に仕立て直そうと野心燃やして執筆決意した次第である。

米作者の壮大な古代ユヤの歴史の叙事詩の力を借りて、この日本を浮き彫りにできないだろうか? 作品に七つのモチーフを盛り込んだ。そこでは根底に熟年も含めた日本の男社会が、間違いなく可笑しくなっている兆候を描いてみたかったのである。

1 ひきこもりやトトの若者

2 技術開発の評価体制

3 考古学の魅力

4 天下り官僚の贈収賄

5 異常気象の豪雪

6 登山人気や登攀の世界

7 最近の「トガブーム」

妻永井真琴を作品の語り部に、夫の永井剛一朗、長男剛志、腹心の部下田口泰雄、隻腕登山家梅沢紀夫他を登場させた。古代イスラエルと現代を繋ぐための伏線として、夫永井剛一朗の臨死体験、幽体離脱を、前世言語を解し、中東に憧れユタガの大陽礼拝に惹かれ、インストラクターを目指す息子剛志のオカルト的な霊能力を配してみたが如何だろうか? 成功したか否かは読者の意見を待つしかない…。

了